大魔王ゾーマになってしまった男の末路

黒雪ゆきは

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

腹が減り過ぎて血迷った俺は、奇妙な見た目をした激マズの果実を食べた。

そして――――大魔王ゾーマになってしまった。

目次

001 大魔王ゾーマになった日。 1
002 ロールプレイの夜明け。 5
003 大魔王の住む島。 10
004 街。 17
005 出逢い。 26
006 二人だけの秘密。 33

００１　大魔王ゾーマになった日。

ちょっとこれまでのことを振り返ってみようと思う。
多分、これから話すことはとても信じられないだろう。
俺だって本当に意味がわからない。
それでも全てが紛うことなき事実だと約束する。
さて、どこから話そうか。
そうだな、やっぱりまずは俺が『転生』もしくは『転移』したであろうことからかな。
あろう、なんて曖昧な表現をしたのは、この世界に来る前の自分自身のことが全くと言っていいほど思い出せないからだ。
どんな世界だったかはぼんやりと覚えている。
でも肝心の自分自身については綺麗さっぱりと忘れてしまったようなんだ。
突然この世界に転移したのか、はたまた死んでこの世界に転生したのか。
まあ今となってはどうでもいい事だ。
考えるだけ無駄だから。
はぁ……。
それで、気づいたら俺はこの世界にいた。
親もいなければ知り合いもいない。
難易度がえげつなすぎるスタートだ。
その瞬間、俺は神なんてものが存在しないことを確信した。
それか、きっと俺は前世にとんでもない大罪でも犯したのだろう。
じゃなきゃ納得できんわ、こんなキツすぎる人生。
小さな村があるんだが、誰も助けてくれやしなかった。
時々食べ物を分けてくれる人もいたけど、ほとんどは見て見ぬふり。
まあ、それは仕方ないよな。
お世辞にも裕福な村じゃないんだから。
みんな自分の生活で精一杯なんだ。

思考を放棄し、自分の不幸を全て他人のせいにできるほど俺が子供だったなら、もうちょい楽だったのかもしれないな。
仕方ないことだと理解してしまっているからこそ、どうしようもないんだ。
だから俺は大樹のうろを寝床にしながら、森の木の実を食べたり、村のゴミを漁ったりしながら生きた。
幸いだったのが綺麗な川があったこと。
そのおかげで水だけは困らずにすんだ。
とはいえ、安定とはかけ離れた生活だ。
食べ物にありつけない日々が続くなんてこともザラにあった。

そうだな――――〝その日〟も空腹で死にそうだったのを覚えている。

確か激しい雨の日だった。
腹が減りすぎて目眩がしていた。
朦朧とした意識のなか、何か食べ物はないかと森をさまよっていたんだ。
そして見つけた。
奇妙な見た目をしたその果実を。

――――『悪魔の実』

そう、それは悪魔の実。
何故かそうであると確信した。
その名前が突然俺の頭の中に浮かんだんだ。
カナヅチになるかわりに、人間離れした能力を手に入れることができる不思議な果実。
だが、その時の俺にはぶっちゃけそんなことはどうでもよかった。
食べ物ッ!!
そう、食べ物があるッ!!

空腹すぎてテンションもおかしかったと思う。
後先なんて考えず、ほんの一瞬も迷わずに俺はそれを口にした。
味は最悪の極み。
ゴミとか漁っていた俺だけど、その果実はダントツで激マズだった。
どんなものでも美味しく感じるくらいには空腹だったはずだけど、悪魔の実の味はそれを軽く凌駕したんだ。
でも少しだけ空腹は満たされた。
すると少しずつ冷静さを取り戻すわけだ。
俺は自分が『悪魔の実』を食べたという事実を、その時ようやく理解した。
そこで気になるのは一体なんの実を食べたのか。
どんな能力を手に入れたのか、ということだ。
結果から言うと、それはあまりにもすぐに分かった。
青かったんだ。
自分の手が。

……え？

マヌケな声が出た。
慌ててもう一方の手を見る。
当然のように青い。

……ん？

というか服も変わってる。
見慣れたボロボロの衣服ではなく、なんか禍々しいローブになっていた。

……えええええッ!!!

気づけば俺は川に向かって走り出していた。
明らかに異常事態だ。
すぐにでも自分の見た目を確認したい。
その一心で俺は走った。
視点が異様に高い。
いや、高すぎる。
走りながら嫌な予感はどんどん大きくなっていく。
そして……川に着いた俺は自分の姿を確認し、約5秒間思考停止した後、この島の隅から隅まで響き渡るほどの大声で叫んだ。
「大魔王ゾーマじゃねぇかァァァァァッ!!!!!」

００２　ロールプレイの夜明け。

それじゃあ続きを話すとしよう。
ぶっちゃけ今まで話したことは序章にすぎない。
ここからが本題だ。
自分の見た目が完全に『大魔王ゾーマ』になってしまった俺。
思わず『大魔王ゾーマじゃねぇかァァァァァッ!!!!!』と叫んでしまうのも仕方ない。
そして出た声も今までの聞き慣れたものじゃなかった。
なんというか、魔王っぽい感じの怖い声になってしまっている。
その事実が俺をより一層混乱させた。
もうパニックよ。
意味もなく川のそばを歩き回り、川を覗きこんで自分の顔を確認し、また歩き回る。
何をやってるかなんて説明できない。
そうせずにはいられなかったんだよその時は。
だが、めちゃくちゃ混乱している俺を更に混乱させる出来事が起きた。

――ズドーンッ!!!!

村の方から馬鹿でかい音が聞こえてきたんだ。
もう訳がわからない。
正直無視しようとも思った。
どうやって元の姿に戻ればいいのかも分からないし、誰にも見られるわけにもいかない。
だけど……村人の悲鳴だけは無視できなかった。
何か良くないことが起きている。
だからといって別に助けてやる義理なんてないし、なんなら俺が助けて欲しいくらいだ。
ほとんどの人間は俺のことを助けてくれなかったとはいえ、食べ物

を分けてくれた優しい人間がいることも事実だ。
それでも自分の命が最優先であることは揺るぎない。
そんな優柔不断な俺が出した結論が……ちょっと様子だけ見てみよう、である。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「ギャハハハハッ!!　有り金は全部奪えッ!!」
「了解だぜお頭ァッ!!」
……うわー、海賊だー。
物陰に隠れながら村の様子を見てみれば、何気に初めて見るガチの海賊が村を襲っていた。
こんな化け物の姿をした俺だが、心は至って普通。
怖いものは怖い。

……いや、怖くはないな。

何故か不思議な程に怖くはない。
だから……できるなら助けて上げたい。
でもどうやって？
自分に何ができるのかまだ全く把握していないのだ。
どういう訳か恐怖心が麻痺しているが、実はあの海賊がめちゃくちゃ強い可能性だってある。
助けたいという気持ちはあるが、いざ行動に移そうとすると不安ばかりでてきてしまう。
分かりやすく言えば、ビビっていたんだその時の俺は。
でも状況は待ってくれやしなかった。
「きゃあっ!!」
「お頭ァー!!　この娘は高く売れるぜェッ!!　連れて行こうッ!!」

「シルファッ!!　おのれ海賊共ッ!!　黙ってりゃいい気になりやがって!!」
「おお?　なんだやる気か?」

うわー、一触即発じゃん……。
女の子の1人が海賊に連れて行かれそうになった。
そのことがきっかけで海賊と村人の全面対決が始まりそうになっていたんだ。
「どのみちここで海賊共に食料を奪われちまったら冬は越せねェッ!!
やってやろうぜッ!!」
「そうね、言う通りだわッ!!　戦うしかないのよッ!!」
「儂ぁ戦うぞッ!!」
「俺もだァッ!!!」
「あたしも戦うわッ!!!」
殺気立つ村人たち。
まともな武器なんてほとんどなく、大半の村人がトンカチや鍬を構えている。
だが、その程度で怖気付く海賊じゃない。
「ギャハハハハッ!!　威勢だけはいいなテメェらッ!!」
「調子に乗ってんじゃねぇぞ村人風情がよォッ!!!」
「やっちゃいやしょうぜお頭ッ!!!」
……最悪だ、一刻の猶予もない。
いつ殺し合いが始まってもおかしくない状況。
あぁぁぁ、クソったレッ!!
今日はなんだってんだッ!!
激マズ果実を食べて『大魔王ゾーマ』になってしまった挙句、そのタイミングで海賊が襲ってくるってどんな確率だよッ!!
でも、どうにかしたい。
どうすればいいんだチクショウッ!!
この時の俺は冷静じゃなかった。
とてもじゃないが冷静じゃなかったんだ。

だからあんな……馬鹿みたいな考えを思いついてしまったんだろうな。

ん、待てよ。

そういや俺の見た目って……大魔王ゾーマだよな。

ただ姿を現すだけで海賊はビビって逃げて行くんじゃね？

もっと効果的に、ガチで大魔王ゾーマのロールプレイしたらビビり散らかすんじゃね？

……と、考えた。

その時は本当に名案だと思った。

無駄な戦闘することなく海賊共を追い払えて、村の皆を守ることができる。

完璧だ、これより素晴らしい作戦は他にない。

馬鹿だよな。

でも色々なことが起こりすぎて冷静じゃなかったんだから許して欲しい。

「うぉぉぉぉッ!!　覚悟しろ海賊共オオオオッ!!」

「海賊の怖さを思い知りやがれッ!!!」

もはや時間はなかった。

２秒後には殺し合いが始まってしまう。

だから俺も決断しなくちゃいけない。

ええいっ!!　もうどうにでもなれ!!

そして俺は物陰からその姿を現し、第一声にこう言ったんだ。

「――――誰だ。わしの眠りを妨げる者は」

海賊、村人。

全員がエネル顔になった。

００３　大魔王の住む島。

「えええええええええッ!!!」
ほぼ全員の叫び声が重なった。
その瞬間だけは、敵同士のはずの海賊と村人の心が完全に１つとなっていた。
何故か妙に冷静な心で、人間って本当に予想外の出来事が起きるとこうなるんだなー、と考えていたのを覚えている。
……さて、どうするか。
大魔王ゾーマと言えばやはり冷気系の呪文。
その能力のせいなのだろうか。
今こんなにも空気が凍りついているのは。
「なな、ななな、何者なんだお前はァァァッ!?」
そんな時、海賊の船長っぽい奴がガクガクと震わせた剣先をこちらに向けながら俺にそう問いかけてきた。
ある意味ホッとしたよ。
このまま誰も何一つ喋らない状況が続いたらどうしよって、内心ドキドキしてたから。
「ふっふっふっ……我が名を知りたいか。良かろう」
ここが大切だ。
変な恥じらいは捨てろ。
ウジウジとした演技ほど見苦しいものはない。
大きな声を意識して、堂々とするんだ。
なりきれ、お前は世界を世界を恐怖のどん底にたたき落とした大魔王。
大丈夫。
絶対にみんなビビる。
今の俺はそれくらい怖いッ!!
超怖いッ!!
必死に心を落ち着け、そして少しだけ笑みを浮かべながらその口を開いた。

「――我が名は大魔王ゾーマッ!!　全てを滅ぼす者だッ!!」

……我ながら何言ってるんだろう俺は。

恥ずっ、恥ずすぎるだろう普通に。

大魔王ゾーマって名乗るだけでいいのに、アドリブで全てを滅ぼす者だーとか言っちゃったんだけど。

「だだだだだ、大魔王だとぉぉぉぉぉぉ～!?!?」

良かったー、ちゃんとビビってくれてそう。

「やべぇよお頭ァッ!!　アイツは見るからにやべぇッ!!　逃げやしょうッ!!」

「いいいいやぁぁぁぁぁぁ!!」

「おいバカッ!!　船長をおいて逃げんじゃねぇッ!!」

村人は状況が未だに飲み込めないのか、ただ唖然と立ち尽くしている。

海賊達はいい感じにビビってくれた。

よしよしいい感じだ。

このままビビって逃げ出して――

「馬鹿やろうッ!!!　テメェらそれでも海賊かッ!!!」

……え。

なんか船長さんがやたらと気合いに満ちた目で俺を見てくる。

いやいいってそういうの。

勇気を振り絞って挑んでくるみたいな展開はいらないって。

「化け物が怖くて海賊なんてやってられるかッ!!!　そうだろうお前らァッ!!!」

……あれ。

なにコイツ。

急に主人公感だしてきたんだけど。

最悪なんですけど普通に。

うん、正直に言う。

その時の俺は馬鹿だった。

海賊を見くびっていた。
見栄と度胸だけはいっちょ前だということを知らなかったんだ。
「そ、そうだ。船長の言う通りだ!!」
船長に鼓舞され、1人がそう叫んだ。
最悪の極み。
「よく考えりゃあ、アイツ1人だぜ!! 俺たちが負けるはずねぇッ!!」
「しゃあああッ!! やってやるぜぇぇぇッ!!」
「ぶち殺してやるよッ!! 覚悟しやがやれ大魔王っ!!」
……俺、完全に悪役なんですけど。
なんでなん。
なんかすっごい負ける雰囲気なの何？
おい神ッ!! 仕事しろよ馬鹿たれッ!!
お前いつになったら働くんだよッ!!
いっつも俺ばっかり不幸にしやがってッ!!
盛り上がる海賊を目の前に、俺は内心で冷や汗をかいた。
「いくぞテメェらァァァッ!!」
「おおおおぉぉぉぉぉぉッ!!!!」
怒号と共にこちらへ走ってくる海賊達。
いやどうしよう。
本当にどうしよう。
覚悟ガンギマリしてる顔なんだけど。
目とか完全に血走ってるし怖っ。
はぁ、本当に俺ってつくづく運がない男だなって思う。
でもなんでだろう。

やっぱり――まるで恐怖は感じない。

不思議なもんだ。
このままじゃ間違いなく殺されるってのに。
何故かは自分でも分からない。
「……愚か者共が。貴様ら程度がこの大魔王ゾーマに挑もうなど片腹

痛いわッ!!」
自然とそんなセリフが口から出ていた当たり、俺も完全に役者だ。
周りから見たらだいぶイタイ奴だろうけども。
ドクン。
そのとに、心臓がやたらと大きく脈打った。
ドクン、ドクン。
凄まじく激しくなる動悸。
とてつもなく困惑した。
でも不思議と嫌な感じはしない。
絶対に悪いことではないとなぜか確信できた。

そして――――頭の中に大量の情報が流れ込んできた。

俺はこれがゾーマの力なのだと感覚で理解した。
手足を扱えるように、この『呪文』を使える。
いや、まだ完璧にとはいかないだろう。
ゾーマの力を引き出すにはそれ相応の時間が必要だ。
それでも今はこれで十分すぎる。
どれにしようか。
どの呪文でコイツらを倒そうか。
そうだな。
今扱える最高の呪文が相応しい。
そんな浅はかにも程がある考えで、俺は〝その呪文〟を選択してしまったんだ。
今でもすごく後悔してます。
まあ、もう遅いけど。
使用する呪文を決めた俺は、ゆっくりと両手を海賊共へと向けた。

そして――――

――――『マヒャド』

その瞬間、圧倒的質量の氷塊が打ち出された。
「ぎぃやあああぁぁぁッ!!!　マジの大魔王じゃねぇかァァァッ!!!」
断末魔と共に海賊共はもちろん、俺の視界に映るほぼ全ての景色が氷の世界へと変わってしまったんだ。
その一部始終を見ていた村人たち。
当然のようにまたエネル顔になっていた。
……え、やばっ。
その時は驚きすぎて、そんな感想しかでてこなかった。
威力はそれなりに高いだろうなと思っていた。
でも予想以上に半端じゃなかった。
想像の５０００倍くらいの威力があった。
村の半分以上が凍りついてしまったし。
「だ、大魔王様が海賊を倒してくれた……」
「……え」
村人の１人がポツリとそんなことを言った。
だから思わず『え』って言っちゃった。
「大魔王様が海賊を倒してくれたぞォォォォッ!!!!」
その瞬間、歓声が爆発した。
絶対怖がられると思っていたのに。
最早意味が分からない。
「ありがとうございます!!　ありがとうございます大魔王様ッ!!」
「娘の命を救っていただき感謝の言葉もありません!!」
「うわぁぁぁぃッ!!!」
もはやそれは狂喜と言っていいレベルだった。
これは俺の予想だが、多分吊り橋効果的なやつだろう。
めちゃくちゃ化け物な奴が、何故か自分達の命を救ってくれた。
そのギャップが村人達をここまで狂喜させたのだ。
「う……うむ」
とりあえずそれだけ言っといた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ってのが、約2年前の話。
「ゾーマ様、何かご所望のものはありますか？」
「……いや、うん、ないぞ」
「かしこまりました。何かあればいつでもお申し付け下さい」
「……うむ」
あぁ……胃が痛い。
あの海賊を退けたことにより村人は狂喜した。
そしてそれからも何度か海賊を撃退したことで、狂喜は狂信へと変わってしまったんだ。
それで今となってはなんか崇め奉られている。
それは百歩譲っていい。
あのゴミを漁っていた毎日からは想像も出来ないほど良い生活をさせてもらってる。

ただ最悪なのが……魔王のロールプレイをやめられないこと!!

いつまで続けんのこの口調っ!!
辞めたいんだけど!!
てか人間に戻れるっぽいのに、戻るタイミング完全に失ってるよ!!

……はぁ。
まあ贅沢は言ってられない。
やることは意外と多いから。
この世界では『安全』ってのがすごく価値あるものらしい。
そりゃそうか。
大海賊時代なんて言われてるし。
そのせいで、どこからか噂を聞きつけた人々がどんどんこの島に集まっているんだ。
そのおかげで発展してるけど、俺の魔王ロールプレイは永遠にやめ

られそうにない。
はぁ……胃が痛い。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

とある西の海。
小さな島の小さな教会。
そこには『化け物』と呼ばれた孤児の女の子がいた。
奇妙な果実を食べてしまったのが運の尽き。
周りの人間に気味悪がられ、避けられてきた。
そのため部屋に閉じこもり、人との関わりを避けるようになってしまうのも仕方の無いことだ。
そんなとき、その女の子は1つの噂を耳にした。

――――『大魔王の住む島』

その島は大魔王が支配するという。
なのにそこは笑顔に満ち溢れ、どんな海賊も手を出せない。
そんな根も葉もない噂だ。
でも、その女の子にとっては大きな希望となった。
自分と同じ化け物がいる。
なのにそこは笑顔に溢れてるというのだ。
行ってみたい。
女の子がそう思うのに時間はかからなかった。
そして女の子は『航海術』の勉強をするようになった。
いつかその島に行くために。

００４　街。

何人たりとも入ることを許していない俺の聖域。
それはこの寝室だ。
そこで俺は重い瞼を持ち上げる。
何度か目をこすり、大きなあくびをひとつ。
正直まだ眠い。
寝ていたい。
寝てしまおうか。
いやダメだ。
俺はいつまでも寝ていたい欲望に何とか打ち勝ち、ベッドを出た。
くぃーー、と伸びをする。
あぁ、この部屋にいる時は心が安らぐ。
今の俺は恐怖の大魔王なんかじゃない。
ただの人間だ。
ここにいるときだけが人間の姿でいられる唯一の時間。
あまりにも大きくなってしまった人々の盲目的信仰心。
それを裏切るのが怖すぎて、俺が本当はただの人間だなんてもう言えやしない。
てか普通の人間ならあの魔王っぽい喋り方や態度はなんだったのって話になる。
……恥ずすぎる。
恥ずすぎるにも程があるッ！
皆の期待を裏切らない為にも、俺は大魔王であり続けなければならないんだッ！
「はぁ……どこか遠い海へでも逃げてしまおうか」
いかんいかん。
良くない考えだ。
まあ、この島を出てもっと広い世界を冒険することに興味が無いわけじゃない。

ちょっと面白そうだ。
ロマンがあり、男心がくすぐられる。
「――――ハハっ、俺も変わったな」
つい笑ってしまった。
これまでは日々を生きることに必死だったが、今は外の世界に興味を持てるほどに心に余裕がある。
それが少しだけおかしかった。
まあ、何はともあれ今は無理だ。
とりあえず目先のことに集中しよう。
「さて、今日も頑張りますか」
ちょっと気合いを入れ、俺は『大魔王ゾーマ』へと姿を変える。
そして大魔王用に設計されたドデカい扉をゆっくりと開けた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「……」
「ん？　どうかなさいましたかゾーマ様？」
「……うむ、何も問題はない」
「左様でございますか。それでは本日の報告を始めさせていただきます」
……いや、言いたいことはある。
俺は今『玉座』的な椅子に腰を下ろしているんだけど……ゴツゴツしてお尻が痛い。
いつも思ってたわ。
何これ？
なんか色んな獣の骨を使っているっぽいんだけど……痛い。
お尻がすんごく痛い。
分かるよ。
これが努力の結晶であることはとても伝わってくる。
めちゃくちゃ精巧にできてるし。
魔王っぽさを追求したのも分かる。

……でもいいから!!
何でもかんでも魔王っぽくする必要ないから!!
ふかふかのソファとかでいいわ!!
俺結構な時間ここに座ってるから毎日お尻が痛いのッ!!
すごく痛いんだよッ!!
「……」
って、言えたらいいんだけど。
度胸のない俺は言えないんだ。
てかそれ以前に……いつも俺の傍にいる付き人っぽい君は誰なの!?
定期的に入れ替わるし。
日替わりなんかな。
「続きまして、本日は――――」
「あぁ、少しいいか？　話を遮ってすまない」
「いえ、滅相もありません!!　なんなりとお申し付けください!!」
さすがに名前も分からんのはヤバいと思ったので、聞くことにした。
「貴様の名はなんという？」
ごめんね、貴様とか言って。
でも魔王っぽく振る舞おうと思ったらこんな感じの言葉遣いになっちゃうの。
許して欲しい。
「これはこれは！　申し遅れました！　私は本日の大魔王様の補佐を担当致します、『クルミン』です！　まだ不慣れなことも多いためお役に立てるか分かりませんが、誠心誠意務めさせていただきます！」
「……あ、うむ。よろしく頼む」
「はい！」
すっごい元気。
それにクルミンって。
名前可愛いなオイ。
へぇー、補佐ね。

いつから補佐なんて制度が始まったんだろう……。
何も聞いてないよ俺。
いいのかなぁこんな感じで。
「本日、愚かにも大魔王様の島を侵略しようと海賊が襲ってまいりましたが、我が島の警備隊が撃退しました」
「うむ、素晴らしいではないか」
「後ほど私の方から大魔王様のお言葉は伝えておきます。彼らも喜ぶことでしょう」
そう、うちの島にあるのはもはや村という規模でなく『街』と言っていい。
ここ2、3年ですごく発展したんだ。
襲ってくる海賊共を撃退し、そこで手に入れた金銭をこの島の発展に投資した。
それが怖いほどに上手くいったんだ。
島が発展し、より多くの人々が集まり、さらに発展していく。
そんな好循環が続いた。
結果として『村』は『街』になった。
ついこの前まで、その日の食べ物さえ危うかったとはとても思えない。
今となっては海賊が襲ってきても俺が出る幕はほとんどない。
いつの間にか結成されていた『警備隊』なる組織が撃退してくれるんだ。
……一体いつ出来たんだよそんなの。
まあこう聞くと良いことばかりにのように思えるだろうが、そんなことはない。
この異様なほど島の発展が上手くいってしまったことで、俺への信仰心が加速度的に増長したんだ。
大魔王様が現れてからというもの、全てが上手くいっている。
大魔王様バンザイ、大魔王様バンザイ。
……てな感じ。
ただの偶然でしかないかもしれない、なんて思考は誰も抱かないの

だろうか。
どうやら、人は幸福な時ほど盲目になってしまうらしい。
不思議だよな。
「ゾーマ様の城の建築も滞りなく進んでおります。予定ではあと――」
「待て」
……ん？
今なんて言ったのこの子。
「城……と言ったか？　城が出来るのか？」
「え……た、大変申し訳ありませんッ!!　大魔王様への伝達に不備があったなんて!!　あぁ……私はなんて大罪をッ!!」
「お、落ち着け。失敗は誰にでもある事だ。大切なのはそこから学ぶこと。違うか？」
「はぁぁぁ、なんて寛大な御心。私は感激いだじまじだぁぁぁぁ」
「えぇ……」
泣き始めたんだけどこの子。
なんなの一体。
感情の起伏が激しすぎるよ。
これも大魔王ゾーマの能力なんですか？
魔王のカリスマ的な？
頼むからＯＮ／ＯＦＦ機能つけてくれ。
「すみません、大変お見苦しいところをお見せしました」
「うむ、気にするな」
「はぅぅ……なんと寛大な――」
「――そ、それで、城の外観などはどのようになるのだ？」
またしても面倒くさいことになりそうだったので、俺は言葉を遮り続きを促した。
「あ、はい！　完成予想図はこちらに！」
そう言ってクルミンは一枚の紙を渡してきた。
今の姿では普通の人間サイズの紙はとても小さい。
だから摘むように受け取り、出来上がる城とやらがどんなものか確

認した。
そして、嫌な予感は的中した。
そこに描かれていたのは……まさしく『魔王城』だったんだ。
黒を基調とした禍々しいにも程があるデザイン。
今にも勇者が攻め込んできそうである。
でも話を聴けば既に建設を始めてるっぽい。
ここで俺が少しでも嫌な顔をしようものなら、泣きながら造り直しますぅぅぅ！　と言い出すことは想像に難くない。
「う、うむ。とても素晴らしいな。わしに相応しい城だ」
だからとりあえずこう言っといた。
「はい！　私もそう思います！」
……そう思いますって、悪意のないディスを少し感じちゃったんですけど。
この城が似合うってどうなのよ。
まあいいけど。
「本日の報告は以上になります」
「そうか」
さて、どうしようか。
ぶっちゃけ最近の俺はこの島でなんら仕事をしていない。
きっとこの島を回しているのは俺よりずっと賢い人達で、俺はただの象徴でしかないんだ。
「少し街を見て回るか」
ほんの気まぐれでそう言った。
「かしこまりました。直ぐにお付きの者を手配致します」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

いやぁ、見違えたな。
マジですっかり街じゃん。
あんな小さな村だったのに。
拙いながら道も整備されてるし。

店もたくさん並んでいる。
「素晴らしいな」
それはポロリと零れ落ちた本音だった。
「はい、私もそう思います。これも全て大魔王様のおかげです」
「そんなことはな――――」
「あ、だいまおうさまだ!!」
「ほんとだ！　だいまおうさまー！」
その時、数人の子供が群がってきた。
いや本当に意味わからん。
この見た目が怖くないんか？
みんな感覚麻痺しすぎじゃない？
よく見て。
めちゃくちゃ化け物よ。
「わっはっはっはっはっ！　どう、上手いでしょ！」
子供のひとりが満面の笑みでそう言ってくる。
どうやら俺の笑い方を真似ているらしい。
「ふ、本物を見せてやろう。――――わはははは!!　こうだ!!」
「わはははは!!」
「わはははは!!」
「そうだ！　それでいい！」
『わはははは!!』
２の子供と１人の大魔王。
その笑い声が重なった。
……何やってんだ俺は。
「も、申し訳ありません大魔王様!!　子供たちが無礼を!!」
すると恐らく親であろう女性が走ってきて、凄い勢いで片膝をついた。
「よい、楽にせよ」
「はい！」
「強き子を育てよ。ではな」
「あ、ありがとうございます!!」

なんか逆に申し訳ない気持ちになったので、このくらいで立ち去ることにした。
人の上に立つ器じゃないんだよ俺は。
「またあそぼうねー！　だいまおうさまー！」
「わはははは!!」
運がいいよな俺は。
迫害されてもおかしくないのに。
めちゃくちゃ認められてるよ。
それからしばらく街を回った。
どこへ行っても笑顔で溢れている良い街だ。
怖いほどに俺を慕っている。
「それでは戻るとするか」
「はい！」
辛いことや不満は沢山あるが、まあ俺もそれなりに頑張ろうって思えた。
できることなんてほとんどないだろうけど。

――――ん？

帰路につき歩き始めたその時。
なんか気配を感じた。
これもゾーマの力なのかどうかは分からないわ。
今にも消えそうな弱々しい灯火のような気配だ。
これは悠長にしていられない。
俺はふわりと空中へ浮かび上がった。
「え、大魔王様!?　どちらへ!?」
「お前たちは先に戻っていろ」
「待っ――――」
すぐさま加速する。
海岸の方だ。
気のせいならそれでいい。

でも絶対に確認した方がいい気がする。
それなりの速度で飛んだ為、すぐさま目的の海岸へとたどり着いた。
そして――――壊れた小さな船と倒れた女の子を見つけたんだ。

００５　出逢い。

この子の存在に気づけたのは、何となく第３の目のおかげな気がする。
生活の大半を大魔王ゾーマとして過ごしてきたおかげで、その能力についてもだいぶ分かってきたが未だに完璧とはいかない。
ほんと悪魔の実の能力ってのは奥が深いよ。
いや、ゾーマの能力が奥が深いのか？
まあいい。
今は自分の能力について考えてる場合ではないな。
俺はふと腕の中で気を失っている女の子に目を移す。
ウェーブのかかったピンク色の長髪。
歳で言えば俺と同じくらいか。
なぜそんな１０代そこそこの子供が倒れていたんだ？
壊れた船があったってことは、別の島から流れ着いたってことなんだろうか？
疑問は尽きない。
でも大丈夫だ。
かなり衰弱しているが生きている。
必ず助かる。
気になることは多いが、この子が元気になってからゆっくりと聞けばいい。
うーん、回復の呪文でも使えれば良かったんだが。
少なくとも今の俺は使えない。
とりあえず街の医者に見せよう。
きっと大丈夫だ。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

少女は唐突に目を覚ました。
すぐさま体を起こし、キョロキョロと辺りを見渡すが、

「いっ……」
ズキリと鋭い痛みが走った。
「まだ寝とくんじゃ」
その時、近くから声がした。
少女が振り向くと、白衣を着た初老の男が奥からゆっくりとこちらへ歩いて来るのが見えた。
「軽度の裂傷数箇所に打撲多数、それに重度の栄養失調ときちょる。元気になりたかったら今は大人しく横になっちょれ」
「……だ、だれだおまえ。ここは……どこだ」
少女は警戒していた。
並々ならぬほどに。
それほどまでに心が荒み、人を信用出来なくなってしまっていたのだ。
「まったく、口の悪い嬢ちゃんじゃわい」
医師の男は呆れたようにため息をつき、近くにあった椅子に腰を下ろした。
「まずわしの名はイチジクという。医者じゃ。一応、嬢ちゃんの治療をしたのがわしじゃよ」
「……」
お礼の一つでも貰えるかと少しだけ期待したイチジクだったが、少女はただ睨みつけるのみ。
周りの全てを敵と見なしているかのような鋭い眼光だ。
その目には覚えがあった。
イチジクは後からこの島に来た住人ではなく、貧しい『村』だった頃からこの島にいる。
だからこそこういう目をした身寄りの無い子供をたくさん見てきたのだ。
ただ――その中に奇妙な少年がいた事を不意に思い出した。
何度か食べ物を分け与えたこともあった。

その時は素直に喜ぶが、断ったとしても嫌な顔一つしなかったのだ。
それどころか笑顔で『いつもありがとう』と言う。
まだ小さく極めて過酷な環境で生きているというのに、異様に大人びた心を持った奇妙な少年。
（今はどうしているのじゃろうか。もしかするともう既に……）
ひょんなことから昔のことを思い出し、イチジクは少しだけ感慨深いものを感じた。
「おい！　何黙ってんだ！　私の質問にまだ答えてねーぞ！」
少女の声がイチジクを現実へと引き戻した。
（いかんいかん。わしも歳をとった）
いつの間にか思考が脱線してしまっていることに、その時ようやく気づいたのだ。
「おーすまんすまん。えぇーどこまで話したかのう？」
「ここはどこだ!?」
「あぁ、そうじゃったな。ここは――――」
イチジクは少しだけ溜めを作り、そして答えた。
「――――大魔王ゾーマ様の治める島『アレフガルド』じゃよ」
とても誇らしげな目をしている。
実際、彼にとってこれ以上に誇らしいことは無かった。
とはいえ、この少女には説明しなくてはならないことがたくさんある。
（まずは大魔王様のことから――――）
「大魔王……ゾーマ。それに『アレフガルド』……！　やったー！　ちゃんと着いたー！　やったやったー！」
少女は初めて子供らしく喜ぶ様子を見せた。
「なんじゃい嬢ちゃん。大魔王様のことを知っとるんか？」
イチジクはこの子を連れてきたゾーマから話は聞いている。
海岸に打ち上げられていたと。
まだ子供だということもあり、間違いなく意図せずこの島に流れ着いたのだとイチジクは考えていた。

だが、少女の喜びようから察するにその考えは間違いであったようだ。
「噂は本当だったんだ……！　大魔王はどこにいる!?　すぐに会ってみたい!!　案内してくれ!!」
「〝様〟を付けんか。まったく忙しい子じゃわい。……はぁ。大魔王様は逃げはしない。まずは元気になることを考えんかい」
「でも私は――――」
「――――ダメじゃ!!　元気になるまではここから一歩たりとも出さんぞ!!」
今まで大人しかったイチジクの突然の怒声。
少女はビクリと肩を震わせた。
でもそれも仕方ないのだ。
「お、大きな声出すんじゃねーよ……！　びっくりするだろうが……」
イチジクは医師としての知識を持ちながら、貧しかった頃にたくさんの救える命を見殺しにしてきた。
否、見殺しにするしかなかったのだ。
だからこそ、彼は病気や傷が癒えぬまま患者が病院を去ることを許さない。
『自身の患者は絶対に元気にする』というのが彼の信条なのである。
「それに、嬢ちゃんの今の状態じゃ歩くのもままならんわい」
「……」
諦めたのか、少女は俯き黙りこんだ。
やれやれ、という思いとともにイチジクは大切なことを聞きそびれていることを思い出した。
「そういや嬢ちゃん、名前はなんというんじゃ？」
少女はすぐには答えなかった。
ほんの少し間を置いてから、
「……ペローナ」
そう小さく呟いた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「大魔王様、この度はこの老いぼれに御謁見の機会を下さり――」
「だ、大魔王っ！　わ、わわ、私を一緒に居させて！」
その瞬間、空気が凍った。
言うまでもないが、ゾーマの能力によってではない。
今俺の目の前にいる少女の理解を超えた発言によってだ。
「……え？」
思わず渋い声で『え』と言っちゃった。
すぐに咳払いをして誤魔化す。
あの少女を連れ、医者のイチジクさんが訪ねてきたんだ。
一緒に連れてきた子を見て、『ペローナ』じゃんと思っていた矢先にこの発言である。
いやー気づかんかった。
あの時はボロボロだったし、めちゃくちゃ痩せこけていた。
だが今となっては血色もよくなり、まだ子供だが俺の知る『ゴーストプリンセス』の面影がある。
てか、それよりもだ。
……何でここにいんの？
マジで意味がわからん。
ペローナって本来ゲッコー・モリアと一緒にいるべきだよね。
なぜこの島にいんの？
しかもいきなり一緒に居させて欲しいという謎発言。
俺の脳内でこれでもかと疑問符が乱舞する。
「子供と言えど、大魔王様にその口の利き――」
「よい」
俺は今日の補佐役であるリノンの言葉を遮った。
当然だが今の俺の姿は大魔王ゾーマ。
言うなれば『化け物』だ。
ぶっちゃけめちゃくちゃ怖いはず。

だからこそ分からないんだ。
この島に居たいではなく、俺と一緒に居たいという言葉の意味が。
「何か訳があるのだろう。話してみよ」
「……あまり他の人には聞かれたくない。できれば……大魔王だけに話したい」
「ふむ」
ペローナは本当に言いづらいのか俯きながらそう言った。
「よかろう。貴様ら、席を外せ」
「で、ですが――」
「わしはこやつの話を聞くことにした。その意味が分かるな？」
「……かしこまりました」
何か言いたげではあったが、リノンとイチジクはこの場を後にした。
残ったのはペローナと俺のみ。
「では、話してくれるか？」
「……うん」

――私は『化け物』なんだ。

その言葉とともにペローナは語り始めた。
これまでの日々を。
それは、俺ととてもよく似た境遇の悲劇だった。
ペローナは孤児であるため、教会で暮らしていたそうだ。
とはいえ友達もいてそれなりに楽しかったという。
だが、ある日を境にそれは一変することになる。

――『悪魔の実』だ。

奇妙な果実を食べてしまったことでペローナの世界は暗転した。
ホロホロの実の能力によって意図せずゴーストを出せるようになってしまった彼女を、普通の人間は受け入れられなかったのだ。

――怖い。

――気味が悪い。

そんな負の感情のみを向けられ、『化け物』と呼ばれ続けた彼女が心を閉ざすまで時間はかからなかった。

そして、この島の噂を耳にしたのだ。

自分と同じ『化け物』がいる。

なのに笑顔に溢れている、そんな嘘のような噂。

同じ化け物なら一緒にいてくれるかもしれない。

私を怖がらないかもしれない。

そんな根拠のない希望のみで、彼女は本当にこの島まで辿り着いてしまったのだ。

「お前も……私を『化け物』と言うか？」

不安に満ちた弱々しい声を聞きながら、俺はペローナに自分自身の姿を重ねていた。

ありえたかもしれない未来。

俺も化け物と呼ばれ、迫害されていたかもしれないんだ。

まったく、運がいいよな俺は。

「フ……笑わせおる」

こんなの断る理由を探す方が難しいだろ？

「わしは貴様よりもはるかに『化け物』――大魔王ゾーマだぞ」

「え、じゃあ……」

そんな期待に満ちた目を向けるのはズルだって。

「よかろう！　貴様を我が側に置いてやる！」

俺の言葉を聞いたペローナは向日葵のように笑った。

――これが俺とペローナの出逢いだ。

００６　二人だけの秘密。

ペローナとの出逢いによって色んなことが変わった。
何より今まで曖昧だった現状の把握が完全にできたことが大きい。
原作において、ペローナは確実に２０代だったはず。
つまり今は原作以前の世界だということだ。
でも、分からないこともある。
まったくと言っていいほど……『物語』が思い出せないんだ。
主人公の『ルフィ』を始めとする登場人物の名前や色々な島の名前なんかの知識はある。
俺があの奇妙な果実を『悪魔の実』だと分かったのもそのせいだ。
知識だけならほぼ完璧なのに、どんな物語だったかは分からない。
ルフィは一体どんな冒険をした？
ったく、一番肝心な部分だろうが。
……それさえ分かりゃできるだけ原作に関わることなく平穏に過ごせるのに。
この世界には化け物がたくさんいるから、いくら大魔王ゾーマの力があるとはいえ慢心なんてできやしないんだ。
警戒しすぎるくらいがちょうどいい。
ただ……これは直感だがこのまま平和のまま過ごせる、なんてことはない気がする。
根拠などない。
ただの直感。
なんだろうな、『大魔王ゾーマ』になった俺の宿命として、いつか必ず運命が狂いだす日が来る気がするんだ。
上手く言い表せないが、正直確信に近い。
まあ、考えすぎても意味は無い。
とりあえず今はペローナの今後について考えよう。
はぁ……どうしようか。
不安しかない。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ペローナとの生活が始まり約1年の時が過ぎた。
最初は俺にしか心を開いておらず、他の人間との関わりを極端に避けていた。
でも今となっては、俺が日課としている街を見て回る散歩には付いてくるようになったんだ。
これは大きな進歩だと思う。
0と1の間にとてつもない差がある。
ペローナは大きすぎるトラウマを抱えているにも関わらず、自ら一歩踏み出したんだ。
俺は心から尊敬する。
どれくらい時間がかかるかわからないが、このままいけばいつの日か必ずペローナはまた人を信じられるようになると思う。
それまでは俺が支えてやればいい。
……ただ、未だに決断できずにいることがある。

それは――――俺の〝正体〟についてだ。

ぶっちゃけ、個人的にはバラしてもいいんだ。
その方がよりペローナも安心出来ると思う。
同じ『化け物のような人間』であるとわかった方が、安心できるだろう。
ただペローナはまだ子供で……ものすごく口が軽そうなのである。
今は大丈夫でも、いつの日か他人と普通に関われるようになった時にバラされてしまうのではないかという不安。
心配しすぎかもしれないが、人々のあまりにも大きくなってしまった信仰心にビビってるんだよ俺は。
もしかしたら受け入れてくれるのかもしれないが、そうじゃないかもしれない。
その不安が脳裏にこびりついて離れず、ペローナに正体を明かせず

1年の時が流れたんだ。
はぁ……どうしたもんか。
「ん？　どうかしたのかゾーマさま？　悩みごとなら私が聞くぞ！」
座り心地の悪い玉座に座りながら頭を悩ませていると、顔の周りをふわふわと浮かんでいるペローナが覗き込んできた。
誰かいる時は俺の影に隠れていることが多く、『ホロホロの実』の能力を使うことなんて決してない。
まだ、周りの人間から気味悪がられてきたというトラウマは払拭されていないのだ。
「なに、他愛ないことを考えていたに過ぎん」
「そうか。ふぁ～、私はそろそろ寝ようかな。おやすみゾーマさま」
そう言うと、ペローナはふわふわと奥の部屋へと消えていった。
その後ろ姿を見送りながら、俺はやっぱり決断できずにいた。

――幸か不幸か、この悩みは今日限りとなる。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ペローナは夢を見た。
否、見ているという表現の方が正しい。
（……またここか）
見慣れた教会の見慣れた部屋。
様々な人間に無視され、気味悪がられてきた場所。
ここには彼女のトラウマが詰まっている。
なぜかはわからないが、ここが夢の世界だと完全に認識できるのだ。
もうこの夢を何度見たか分からない。
とても馴染み深い悪夢だ。

――カサッ

「……ん？　なんだ？」
この夢は何度も見ている。
なのに聞き慣れない音が聞こえた。
思わず振り返ったが誰もいない。
だが所詮は夢。
この程度、気にする必要も無い。
ペローナはドアノブに手をかけ、ガチャりと開けた。
とても綺麗とは言えない、古く劣化した廊下を歩く。
しばらく歩くと、シスターがいるのが見えた。
そしてシスターと目が合った。

ほんの僅かに――――シスターの顔が引き攣る。

きっと本人は気づいてないと思っているだろう。
だが、不幸にもペローナにはそれが嫌でも分かってしまうのだ。
「あ、あらペローナ……ご飯ならすでに準備しているわ……」
「ありがとシスター」

とはいえ――――もう彼女は1人ではない。

彼女の顔は曇らない。
もうどうでもいいのだ。

『ゾーマさま以外はどうでもいい』

自分と同じ化け物。
1人じゃないと心から思わせてくれる存在。
ゆえに、怖くない。
どんなに気味悪がられようと、どんなに避けられようともう怖くないのだ。

『ゾーマさまさえいてくれればいい』

彼女自身に自覚はないが、これは『依存』に近い感情。

ゾーマとは、ずっと1人で生きてきた彼女がようやく見つけた居場所なのだ。

この事実が彼女の心をどれほど光で照らしたことか。

暗闇の世界で生きてきた者が決して見ることのないと思っていた光を見つけたのである。

絶対にその光を失いたくないと思うことは、至極当然の感情だろう。

ほぼ無表情でシスターの横を通りすぎるペローナ。

それからしばらく歩けば、他の孤児のみんなと出会った。

「うわぁ～！　幽霊女だ！　幽霊女が来たぞ～！　みんな逃げろ～！」

きゃはははは、と笑いながら逃げていく。

子供の純新無垢な悪意がペローナを襲った。

だが、やはり彼女は動じない。

「テメェらなんか、こっちから願い下げだっての」

うんざりする夢だ。

でも、ここまで来たらもうすぐ夢から覚める。

あと少しでまたゾーマさまに会える。

そう思えばこんな嫌な夢でも――

――カサカサッ

「なんだ??」

またあの音が聞こえた。

この音はなんだ？

その答えだけが分からない。

振り返ってみるもやはり誰もいない。

「一体何が――――」

――ドサッ

唐突に姿を現したそれは――――存在するはずのない超巨大なゴキブリだった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「ギャアアア～～～～～～!!　ゴキブリ～～～～～!!　ゾーマさま～～～～!!」

ペローナは飛び起きた。

その勢いもあいまって意図せず幽体離脱してしまう。

そしてあらゆる壁をすり抜けながら彼女はふわふわと飛ぶ。

いち早くゾーマの元へと行くために。

「ゴキブリ嫌い～～～!!　怖いよゾーマさま～～～!!　助けて～～～!!　え～～～～～ん!!」

そう、彼女は完全にパニックとなっていた。

馴染み深い悪夢かと思えば、最後にとんでもない化け物が登場したのだ。

半狂乱となるのも仕方ないだろう。

当然、この時の彼女の脳内に『ゾーマとの約束』などありはしない。

寝室にだけは入ってはいけないという、とてもシンプルな約束だ。

しかし、勢いそのままにペローナは壁をすり抜ける。

そしてたどり着いてしまう。

ゾーマの元へと。

「ゾーマさま～～～～!!　怖いのゾーマさ……え？」

そこに居たのは大魔王ゾーマではない。

普通の青年だった。

ペローナとほぼ歳の変わらない普通の青年だ。

「……マジか。こんな感じでバレるんかい」

「え、えええ!?　ゾーマ……さま!?」

この日――二人だけの秘密ができた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

今年で俺も二十歳。
なんとかこの化け物が蔓延る世界で生き残れている。
島も順調に発展し、『街』は『都市』になった。
城も完成してめちゃくちゃいい感じだ。
ただ……完全に魔王の城とその城下町って感じなんだよなぁ……。
なんでこんな禍々しい感じのデザインにしちゃったんだろう。
黒を基調とした街並み。
完全に魔族の世界って感じなんですけど。
まあいいか。
とりあえず、今は鍛錬に集中しよう。

――『サイコキャノン』

収縮された闇の魔力が弾丸の如く打ち出され、海で大爆発を起こす。
ふむ、まあまあだ。
原作の世界が近づいていることに危機感を覚えた俺は、いつからか忘れたけど本格的に鍛錬するようになった。
呪文は割とたくさん使えるようになった。
覇気は……難しいね。
具体的には武装色の覇気がまったくと言っていいほどできない。
見聞色の覇気は、多分この第三の目のおかげもあるんだろうけど、割とすぐに扱えるようになった。
そのおかげでひとつ出来るようになったことがある。
それは――擬似的な空島化だ。

どういうことかというと、俺の第三の目による千里眼と見聞色の覇気を組み合わせることで、ほぼ完全に犯罪をなくすことができたのだ。
千里眼と見聞色の覇気によってこの島全域を見通し、犯罪者を見つければめちゃくちゃ加減した呪文によって攻撃する。
そしてその場所に警備隊を送ればいい。
はい、犯罪率ほぼ０の実現だわ。
この事実は、またしてもこの島の発展を加速させた。
……最近はこの島の噂が広がり過ぎてちょっと怖い。
原作のヤバい登場人物とか来ないか不安。
覇気には得意不得意があるらしいけど、俺の場合は完全に見聞色の覇気に偏ってるんだろうな。
でもどんなに鍛錬しても武装色が全くできんのはなんなん？
まあ、俺には『闇の衣』があるから防御面は多分大丈夫だけど。
「ホロホロホロホロ！　お前も飽きねぇなー、ゾーマ」
ペローナの声が聴こえてきた。
正体がバレた『あの日』以降、ペローナは俺のことを呼び捨てするようになった。
せめて外では〝様〟をつけろって言ってるのに……もう諦めたけど。
あと、今でもペローナは俺の傍を離れようとはしない。
それどころか……なんかより一層懐かれてる気がする。
「チェリーパイ作ったぞ！　食うか？」
「あ……うむ、いただこう」
今では普通に外に出られるようになったペローナ。
でも未だに俺の側に居続けている。
良くないと思うんだよなぁ……これだけは。
世の中にはたくさんの幸せがある。
ペローナは今まで辛い思いをしすぎたせいで視野が狭くなり、その幸せが俺の側にしかないと思っているんだ。
まあ、俺は別にいいんだけどさ。

ペローナのことを考えると、本当にこれがベストなのか分からない。
一回だけ、かなり遠回しに俺の側を離れる気はないのか？　と聞いたことがある。
結果、ガチ泣きされた。
それ以来この話題は出せずにいる。
「美味いか？」
「うむ」
「そうか！　また作ってやるからな！」
「……」

こんな嬉しそうな顔されたら何も言えないって。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

波を切る豪快な水音と共にその船は進む。
船上には奇怪な服装の男と、黒服姿の人間が数人。
「何としても『大魔王』をペットにしたいんだえ～！　わちしの〝珍しい奴隷コレクション〟に加えたいんだえ～！」

――純粋なる悪意がゾーマの元へと向かっていた。